

## 韓国の大学生の日本語作文に関する一考察

齊藤明美\*

### < 要 旨 >

本稿は、韓国の大学生の日本語作文について論じたものである。まず初めに、外国語で作文を書くというのはどういうことなのか、について述べている。次に、アンケート調査の結果をもとに、韓国の大学生が日本語作文をどのようにとらえているのかについて言及している。そして、筆者がこれまで経験した韓国の大学における作文指導の実践について述べている。次に、先行研究をもとに学生の作文にみられる誤用例分析の意義について論じた。その後、筆者がこれまで何度か行なった誤用例分析の中から、韓国の大学生が間違えやすい誤用例の代表的なものをいくつかあげている。また、2007年度の二学期に翰林大学校の学生が書いた、電子メールと日本の昔話の感想文にみられる誤用例をあげ、そこにみられる問題点と今後の指導について言及している。日本語と韓国語は共に漢字を用い、語彙、文法、語順等においても多くの類似点がみられる。それで、大学生の多くは日本語は英語より易しいと感じるようであるが、似ているからこそ間違えてしまう場合も多いようである。今後は学生たちの誤用例を調査するだけでなく、それをレベル別に整理し、分析することによって誤用の理由を明らかにし、それらをもとに新しい教材を作成し、より効率的な日本語作文の教授法を開発していく必要があると考えている。そうすることによって、学生たちが同じ間違いをくりかえすことが減少し、今後の韓国における日本語教育の発展に少しでも役立つことができるのではないかと思う。

キーワード：日本語教育 韓国 大学生 日本語作文 誤用例

### 1. はじめに

『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－概要』（国際交流基金）をみると、韓国における日本語学習者の数は約91万人であり、世界の日本語学習者298万人の約3割を占めている。この数は世界第1位であり、2位は中国の約68万人、3位はオーストラリアの約37万人となっている。そして、学習者の多くが、日本語はもちろんのこと、日本や日本の文化等に興味関心を持ち、多くの日本語関係学科が日本の大学と交流している。学生間交流としては、語学研修やホームステイのプログラムがあり、教師間交流としては、共同研究等がある。また最近では、ワーキングホリデーのために日本に行く学生も増えている。そして、殆どどの日本語関係学科にはネイティブスピーカーの日本語教師がいて、数多くの新しい教材が作成され、きめ細かな指導がなされている。

日本語学習の4技能(聞く・話す・読む・書く)の中で、「書く」ことは受動的に聞いたり読んだりするのは根本的に異なる高次な技能である<sup>1)</sup>と思われる。韓国の大学生の中には日本語作文は難しいと感じて

\* 한림대학교 일본학과 교수, 일본어학

1) 姫野昌子(1981)p.1参照

いる人が多いが、その理由の一つには日本語の文字の種類が多さをあげることができるだろう。外国人学習者にとって、ひらがな、カタカナ、漢字、ローマ字等を正確に書き、自分の考えを的確に表現するのは非常に難しい作業であると思われる。しかし、逆に「正しく書く」ことによって、「読むこと」「話すこと」も、よりスムーズにでき、学習した事柄を定着させることができるようになる。

本稿では、韓国の大学生の日本語作文について、誤用例をあげながら問題点を指摘し、それを解決する方法を提案していく。まず初めに外国語で作文を書くというのはどういうことなのかについて述べ、次に韓国の大学生は日本語作文をどのようにとらえているのか、について言及する。そして、筆者の経験による作文指導の実践について述べ、次に先行研究をもとに学生の作文にみられる誤用例分析の意義について述べる。その後、筆者がこれまで何度か行なった誤用例分析の中から、韓国の大学生が間違えやすい誤用例の代表的なものをあげる。また、2007年度二学期に翰林大学校の学生が書いた電子メールと日本の昔話の感想文にみられる誤用例をあげ、そこにみられる問題点と今後の指導について言及する。

尚、今回は学生たちの作文の中から、電子メール、紹介文、映画と昔話の感想文にみられる誤用等について分析した。しかし、ここでは紙幅の都合上、電子メールにみられる誤用例と日本の昔話の感想文についてのみ述べることにする。

## 2. 外国語で作文を書くということ

外国語で作文を書くということは容易なことではない。作文は外国語の総合的な能力を駆使して成し遂げる作業であり、聞く、読むのように受身の技能ではないからである。韓国の高등학교の日本語の教科書を見ると、①聞く ②話す ③読む ④書くの順に構成されている場合が多い。まず聞いて、それから話してみる。そして、読めるようになったら、最後に書いてみようというわけである。これは、最後に作文を書くことによって、総復習、あるいは学んだ知識を定着させることもできるからであろう。

日本語教育における作文指導に関する先行研究には、姫野昌子(1981)、小矢野哲夫(1981)、能登博義(1981)等があり、姫野昌子(1981)には次のようにある。

指導の面からみると、「作文」というよりは「文章表現」という方がふさわしい。すなわち、理解(聞く、読む)があつての表現(話す、書く)であり、その表現方法も口頭を前提とした文章ということである。書くことは、他のいわゆる三技能(聞く、話す、読む)と有機的なつながりをもつ総合的的技能である。文章表現の指導は、口頭練習との関連が重視されるし、内容的には聞いたり読んだりしたことを文章で再現したり要約したりすることも含まれる。また、語句の練習を中心とする短文づくりに始まって、連文によるパラグラフからより長い文章へと書く練習が段階的に展開される。一般に国語教育の作文がもつイメージよりよほど広い範囲にわたるものを対象とすることになる。(p.2)

作文学習は学習者の学習期間、学習歴等によって大きな差が出る。使用語彙の量、文型、文法の理解度等によって書くことができる内容が異なってくるからである。初心者はまず、ひらがな、カタカナのような文字を書くことから始めなければならない。そして、初級レベルの作文では学習した文型を用い

で短文を作成することを学ぶ。例えば、自己紹介文を学習すれば、「わたしは～です。」という文を書く練習をする。次に基礎的な語彙、文法、文型を学習しながら短文を並べ、次第にまとまった文章が書けるようになる。そうやって初めて文の内容、構成、文体を考えることになる。そこにいたるまでの途中の作業として、モデル文を学習したり、クラスで議論したりする。あるいはクラスメートと添削しあったりすることが有効な場合もあるだろう。そのような作業を積み重ねて、初めて作文が書けるようになるのである。

小矢野哲夫(1981)は、中級、上級者の作文指導の実情と問題点について言及し、①原稿用紙の使い方、②自己紹介文 ③日記 ④手紙 ⑤説明文、解説文 ⑥論説文の書き方の指導法について述べている。また、能登博義(1981)は、日本研究センターにおける中、上級での作文指導について段階的に論じている。次の①～③は、能登(1981、pp.54-60)から要点を抜粋し、まとめたものである。

#### ①BJARTの段階

この段階での主目的は、文字を正確に書くこと、句読点、符号などを適切に用いること、送り仮名、促音、拗音などの表現が正確に出来るようにすることである。

#### ②ISJ-Iの段階

中位のクラスでは、作文の焦点を文単位に置き、個々の文が正確に書けているかを主たる問題とする。それに対して、上位のクラスでは、その焦点をもう少し広げて、出来事の順序がわかりやすく書いてあるか、要点細部を落としていないか、中心点は明確であるか、段落ごとのまとまりはいいかなども学習の目標に含める。

#### ③ISJ-IIの段階

(ここで使う教材は)すでに習得した能力を基礎にして、更にもう一歩日本人の言語行動に近づかせることを目的としている。

以上であるが、能登(1981)は、ISJ-IIの段階では、「かなり専門的な対談、座談会、あるいはスピーチに必要な表現を習得することを目的としている。(p.57)」としている。また、ISJ-IIの段階の教材には、「あいづちと間」「別の考えを示す」「同意」「反論」「スピーチ」等の言語行動が含まれている。

### 3. 韓国の大学生は日本語作文をどのようにとらえているのか。

2003年に実施したアンケート調査<sup>2)</sup>の結果をみると、韓国の大学生は「聴解」「作文」「会話」「読解」の順に難しいと感じていることがわかる。

www.kci.go.kr

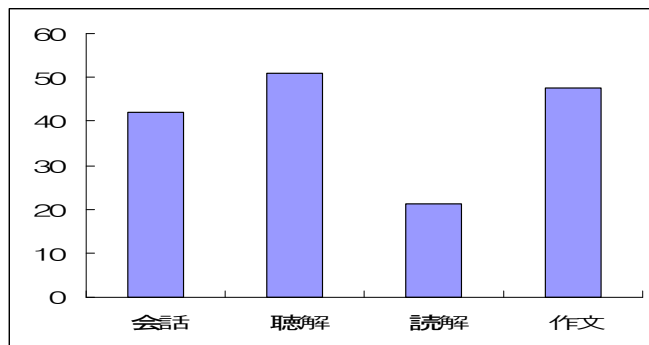
2) 本調査は2003年5月にソウルの中央大学校の学生180名と翰林大学校の学生232名、計412名を対象に行なった。中央大での調査は任榮哲先生にご協力いただき、翰林大での調査は齊藤明美が行なった。尚、調査結果の整理分析は翰林大学校の趙恩慶先生に協力していただき齊藤明美が行なった。

〈表1〉韓国の大学生にとって難しいこと

難しいこと	(%)
会話	42.1
聴解	50.8
読解	21.3
作文	47.6

(齊藤明美2006、p.46参照)

〈図1〉韓国の大学生にとって難しいこと (%)



ここでの調査対象者は、韓国の大学で1年以上日本語を学んだ経験があり、日本語の基礎については理解していると思われる学生たちであるが、学習者にとって難しい項目は、学生の日本語の理解度と関係があると思われる。〈表1〉〈図1〉をみると、「読解」と答えた学生は21.3%で、あまり多くないことがわかる。それに対して、「聴解」は50.8%、「作文」は47.6%であり、比較的高い数値を示している。これは、基礎を学んだ学生にとっては辞書があれば何とか読解はできるということであろう。また、篠原信行(2004)が同じような調査を台湾でも行なった<sup>3)</sup>が、台湾の大学生は「作文」が一番難しいと答えている。これらの結果をみると、学生が難しいと感じている学習内容は母国語と大きな関係があると思われる。台湾の学生にとって日本語は、彼らの母語と全く異なった構造をもった言語なのである。

また、具体的に何が難しいのかを尋ねた結果を示すと次のとおりである。

## ○日本語

〈表2〉韓国の日本語学習者が難しいと感じていること

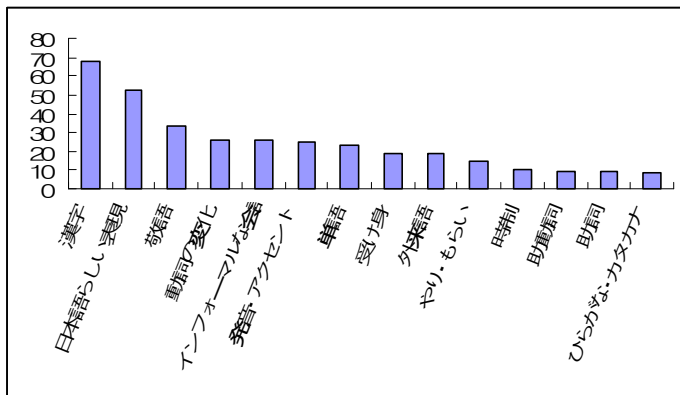
順位	難しいこと	(%)
1	漢字	68.3
2	日本語らしい表現	52.4
3	敬語	33.5
4	動詞の変化	25.4

3) 篠原信行(2004)p.82参照

5	インフォーマルな会話	25.4
6	発音・アクセント	24.8
7	単語	22.9
8	受け身	18.5
9	外来語	18.5
10	やり・もらい	14.7
11	時制	10.7
12	助動詞	9.7
13	助詞	9.4
14	ひらがな・カタカナ	8.2

(齊藤明美、2006 p.47参照)

<図2> 韓国の日本語学習者が難しいと感じていること(%)



<表2><図2>をみると、韓国の日本語学習者は、漢字、日本語らしい表現、敬語、動詞の変化等を難しいと感じていることがわかる。韓国語と日本語はどちらも漢字を用い、語順もよく似ている。しかも、日本語の助詞、助動詞に当たることばもある。しかし、類似点が多いため、かえって間違え易いということもある。同じように漢字を用いても日本と韓国の漢字は字体が異なっている。一方、台湾での調査結果をみると、助動詞、受身表現、日本語らしい表現、授受表現、助詞の順に難しいと答えた学生が多かった。これらの結果もまた母国語と深い関係があると思われる。

#### 4. 作文指導の実践

学生たちにとって日本語作文は、必ずしも「作文」という授業だけで学ぶわけではない。文法、会話、読解等の授業においても学習している。例えば、「基礎日本語」の授業で新しい文型を学習すれば、その文型を習得するために作文をする。あるいは、「初級会話」の時間に「家族紹介」を学習し「わたしの家族は～と～です。」という文を学べば、それを書く練習をする。「中級会話」でのロールプレイ

も、作文をしながら会話を考える場合も多い。また、タスク学習で日本と韓国の文化を比較し、文章を書き、発表することもある。あるいは、日本の昔話を学習し、感想文を書くこともある。また、3分間スピーチをすれば、スピーチのための作文が必要になる。そして、3、4年生を対象とした「実務日本語」の授業では、履歴書の書き方、エントリーシートの書き方はもちろんのこと、就職してから必要になる書類や手紙、日本語での電子メールの書き方についても学習する。同じく3、4年生を対象とした授業、「日本語学の理解」では、グループ発表で日本語と韓国語を比較しながら、日本語の特徴についてレポートを書き、発表する。また、学期末のグループ発表では、5~6名の学生が一つのグループを作り、皆で相談をしながらシナリオを書き、10~15分位の演劇をする。演劇の内容は授業によって異なり、「白雪姫」「桃太郎」のような物語から、「会社の風景」「学校生活」まであり、幅広い。学生たちは、演劇のためのシナリオ作成から暗記、実演までに約1ヶ月かけて練習するが、授業時間は2時間位費やすだけで、あとは個人(グループ)指導となる。このように考えると、学生たちには、「作文」の授業以外にも、自己紹介文、日記文、感想文、手紙文、レポート、シナリオ、研究発表のための文章等、さまざまな文章を作成する機会がある。もちろん初級の「作文」の授業では、モデル文を読解し、ポイントとなる文型を学習し、身近に起り得るできごとについて文を作成したりもする。そして、それを指導する教師には学生が作文を書くための事前指導や書いた作文の添削、評価等といった多くのことが求められる。例えば作文を添削する場合にも、単に文字や文法の間違いを訂正するだけでなく、文章の内容はもちろん、構成、形式、文体等についても指導する必要がある。

作文という場合には、口頭作文をも含む場合もあるが、ここでは文字を使って書く場合の作文を指すが、学習の順序を考えてみると、(すでにいくつかの先行研究でも述べられてはいるが)おおよそ次の順序で学習し、習得していけば効果的な学習ができるのではないと思われる。

- ①文字の習得。
- ②単語の習得。
- ④文法を学習する際に学んだ文型を使って短文が書けるようになる。
- ⑤まとまった短い文章が書けるようになる。
- ⑥目的に応じた文章を適切な構成、文体で自由に書けるようになる。

これら、①~⑥のうち、⑤までは初級レベルの学生にも学習できると思われる。これまでの初級者の作文学習は、すでに学習した単語や文型を用いた短文を作成するのが主な学習内容である場合が多かったと思われるが、難しい語彙や表現を用いなくても全体の構成を考えながら一つのまとまった文章を書くことは可能である。むしろ、中級レベルになって、文章構成の基礎から学習するよりも、初級レベルで文の流れを意識しつつ文章を作成する練習をしたほうが、より効率的な学習ができると思われる。そして、中、上級レベルで⑥が可能になることが望ましい。初級レベルの学生に難しい作文を無理に書かせて学習意欲を無くさせるようでは適切な指導とはいえないが、モデル文の読解、口頭作文の練習等と一緒に作文をする習慣をつければ、無理なく学習できると思われる。また、書いた作文をもとにスピーチをすれば、語彙、文型、文法等の総合的な復習にもなり、日本語学習の定着にも役立つと思われる。

⑥の段階では、文の種類(日記や手紙文、要約文やレポート、評論、学術論文、詩、小説などの創作文、あるいはビジネス文書等)によって文体を決め、文章の内容や形式、構成等を組み立てなければならないが、これ等が自由にできることが、作文学習の最終目標でもあるだろう。

## 5. 誤用例に対する先行研究と誤用例分析の意義

学生たちの作文をみると、いつも同じようなところに間違いがあることに気づく。それは、「友だちを会う」の「を」であったり、「先生がなりたい」の「が」、「バスを乗る」の「を」ような助詞であったり、「それは必要するものだ」の「する」であったりする。これらは母語である韓国語の影響が大きい。また、自動詞と他動詞を正しく書くことができなかつたり、形容詞の活用がよく分からないために起る、「人を集まる」、「多い人に会う」などもある。作文を書く学生が変わっても、同じような誤用が繰り返されている場合が多い。

1978年の『日本語教育』(日本語教育学会)においては「文法上の誤用例から何を学ぶか」という誤用例の特集が生まれ、鈴木忍、吉川武時、佐治圭三、遠藤織枝、宮崎茂子、茅野直子・仁科喜久子等の玉稿が寄せられている。鈴木忍(1978)は、文法上の誤用例のうち、混同しやすい格助詞について論究し、誤用の原因として、「学習者の母語からくる干渉もあるし、既習事項からの誤った推理によるものもあるし、学習者の不注意によるものもあるし、教材に取り上げられていなかったことによるものもある。(p.1)」としている。また、「作文の添削をする場合も、ただ誤りをなおすだけでなく、文法的きまり、それを包む文脈、場面なども考慮に入れ、きめ細かい指導が必要である。それと同時に、誤用例から得たものを学習指導や教材に取り入れていくことも忘れてはならない。(p.14)」としている。また、吉川武時(1978)は、誤用例による研究の意義と方法について論述し、「誤用例による研究というものは、たんにまちがいの例をあつめただけでは完全ではない。誤用例の一つ一つについて誤りの原因を分析し、誤りの類型をたて、誤りを防ぐにはどうしたらよいかを考え、それを教材に生かす、つまり新しい教材を編むときにそれをとりこむ—こうしないと、ある項目についての誤用例による研究は完成しない。(p.15)」と述べている。但し、誤用の原因については、次のように述べ、誤用と母語とは関係がないとしている。

誤用例を中心にした研究というのは(中略)いずれの研究も、誤りを分類したり、それぞれの度数を集計したりしている。誤りの原因は、母国語の影響によるところが大きいとふつうには、考えられている。というよりも、一般の人はそう考えがちである。そして例えば、稲垣氏の報告では、何語の話し手がその誤りをしたかということが、一々の例について書いてある。ところが、我々の報告(1)では、それをつくる前に母語別による誤りの傾向というものは、はっきりでないということがわかって、それぞれの誤りに何語の話し手かということは記さなかった。(下線は筆者、吉川(1978)p.15)

このように述べたあと、その理由として次の3つをあげている。

- ①資料が少ないこと。しかし、いくら資料をふやしても、母国語の誤りの傾向がはっきりするとは思われない。
- ②母国語の授業をしていない。
- ③最初に習った外国語の影響を強くうける。これは新仮説としてあげておく。最初に習った外国語とは、東南アジアの学生にとって多くの場合英語である。母語が何であれ、最初に英語を習ったら、次の外国語として日本語を習うとき、英語の影響が出る、という仮説である。

(下線は筆者、吉川(1978)p.15)

確かに様々な国の学生が集まっている日本の留学生の作文をみて、一人一人の母語を考慮に入れて、誤用の原因を解明することは困難であると思われる。筆者も日本の大学で日本語作文の指導をした際、韓国、中国、アメリカ等からの留学生の書いた作文に似たような間違いがあり、誤用の原因を母語干渉に求めすぎるのは危険であると考えたことがある。しかし、吉川(1978)によると、韓国の大学生が日本語を学習するときも英語の影響が出るということになりそうであるが、私のこれまでの韓国での経験では、そのような学生はあまりいなかった。逆に、日本学科の学生が英語会話の時間に「yes」と言わないで「はい」と答えるということを知り、2つの外国語を学習すると相互に影響を及ぼし合うことは強く感じたものである。そして、韓国の大学生の作文をみると、母語の干渉の存在を確信することができる。特に初級、中級レベルの学生には韓国語に引かれた間違いが目立つ。

佐治圭三(1978)は、「文字表記の誤り」「語形の誤り」「語の意味用法の誤り」「文法上の誤り」「表現の問題」について検討している。そして、「こういった検討を、回を重ね、ねばり強く続けて行くことによって、誤用の一般的傾向や母国語別の傾向、教授者側が研究整理すべき問題のリストなどが、次第に明らかになって行くだろうと期待している。また、このような検討の会が広範に、組織的に、行なわれ、その結果が広く活用されることが望ましいと思う。(p.34)」と結んでいる。また、宮崎茂子(1978)は、誤用例をヒントに教授法を考えることについて言及している。

茅野直子・仁科喜久子(1978)も、学生の誤用例分析を教授法に応用することについて言及しているが、「おわりに」で次のように述べている。

教師は普段も学生の試験や作文にみられる誤りから教授法を工夫したり、改善したりしている。おりをみて集中的に誤用例を集め、分析し、その結果について組織的に考察し、より効果的で能率的な教授法を検討することは、有意義で重要であると、改めて思った。(p.65)

以上の他にも、森田芳夫(1981)がある。森田は、韓国の大学生の作文にみられる動詞の誤用例88項目をあげ分析している。

これらを見ると、殆どどの論文において誤用例の収集、分析の重要性を述べ、整理、分析した結果を教材、教授法等に活かしていくことが大切であるとしている。韓国の日本語教育においても誤用例の収集、紹介、分析は行なわれていると思うが、収集、分析に止まり、これを日本語の特質の解明に活かしたり、作文の教材に活かしたりしたものは多くないと思われる。今後は誤用例分析の結果を日本語教育に積極的に活用していくことが必要であると思う。

## 6. 1994、1996、2002、2007年度(1学期)にみられた誤用例

筆者は、これまで何度か学生の誤用例を調査し、その結果を発表してきた。金永権・齊藤明美(1994、1996)、齊藤明美(2002、2007)等がそれである。金・齊藤(1994)は、韓国の大学生(翰林大学校、翰林専門大学)のレポートにみられる誤用例のうち、文法と表記に関する誤用例をあげ、誤用例が生じる原因について言及している。また、金・齊藤(1996)は、金・齊藤(1994)でふれなかった、名詞・形容詞・動詞の誤用例について述べている。齊藤(2002)は、翰林大学校の2、3年生の作文にみられる誤用例のうち、表記、助詞、形容詞を取り上げ説明している。また、齊藤(2007)は、翰林大学校の大学2年生の作文をもとに、名詞、用言、副詞の誤用例について言及しているが、次に、金・齊藤(1994、1996)、齊藤(2002、2007)にみられる代表的な誤用例をあげておく。

(誤用例には\*を付記している。尚、必要に応じて変更しても支障のない部分を多少変更したり、部分的に抜き出している場合もある。)

### (漢字)

- \* 美国 → 米国 (金・齊藤1996、p.66)
- \* 大学校 → 大学 (金・齊藤1996、p.65)

### (表記)

#### (1)清音濁音

- \* 子供だちはテレビを見ている。 → 子供たちはテレビを見ている。(金・齊藤、1994、p.66)
- \* かんごく全国を旅行したいです。 → かんこく全国を旅行したいです。(齊藤、2002、p.176)

#### (2)促音

- \* 二人が会いて一緒に暮す方がいい。 → 二人が会って一緒に暮す方がいい。(金・齊藤、1994、p.66)
- \* 自転車にのりたり、話をしたりした。 → 自転車にのったり、話をしたりした。(齊藤、2002、p.178)

#### (3)長音・短音

- \* みんながいっしょに生きるのは難しい。 → みんながいっしょに生きるのは難しい。  
(金・齊藤、1994、p.67)
- \* 私の仕事はりょこしゃのガイドです。 → 私の仕事はりょこうしゃのガイドです。(齊藤、2002、p.180)

#### (4)カタカナ表記

- \* 韓国のパションは日本と似ています。 → 韓国のファッションは日本と似ています。  
(金・齊藤、1994、p.68)
- \* マイクルジャッソンは有名です。 → マイケルジャクソンは有名です。(齊藤、2002、p.181)

### (漢語名詞の用言化)

- \* 必要する時そばにいるのは誰ですか。 → 必要な時そばにいるのは誰ですか。(金・齊藤、1994、p.64)
- \* 私の性格は活発して楽天的です。 → 私の性格は活発で楽天的です。(金・齊藤、2007、p.276)

(動詞)

- \* 講師が来て話を始めました。 →講師が来て話を始めました。 (金・齊藤、1996、p.73)
- \* 漫画と文がともにいる本で →漫画と文がともにある本で、 (齊藤、2007、p.274)

(時制)

- \* 大学を卒業するあと →大学を卒業したあと、 (齊藤、2007、p.274)
- \* 昨日読む本は面白かったです。 →昨日讀んだ本は面白かったです。 (金・齊藤、1996、p.73)

(授受表現)

- \* 彼が私に辞典をもらいました。 →彼が私に辞典をくれました。 (金・齊藤、1994、p.65)

(受身使役)

- \* 転勤するかもしれないと聞かれて驚きました。 →転勤するかもしれないと聞かされて驚きました (金・齊藤、1994、p.65)
- \* 日曜日の朝、母に起されました。 →日曜日の朝、母に起こされました。 (齊藤、2007、p.281)

(イ形容詞)

- \* 多い人々に会っても仕方ありません。 →多くの人々に会っても仕方ありません。 (金・齊藤、1994、p.64)
- \* 朝ごはんはまずいでした。 →朝ごはんはまづかったです。 (齊藤、2007、p.275)

(助詞)

- \* 夫婦の間の愛を確認する時間がなりました。 →夫婦の間の愛を確認する時間になりました。 (金・齊藤、1994、p.58)
- \* 久しぶりの旅行をしました。 →久しぶりの旅行に行きました。 (金・齊藤、1994、p.59)
- \* 特に夫婦の愛をたくさん見えました。 →特に夫婦の愛がたくさん見えました。 (金・齊藤、1994、p.59)
- \* 私の友達は日本で来ました。 →私の友達は日本から来ました。 (金・齊藤、1994、p.60)
- \* 自身の問題でとらえることができる。 →自身の問題としてとらえることができる。 (金・齊藤、1994、p.60)
- \* 週末には友だちを会います。 →週末には友だちに会います。 (金・齊藤、1994、p.61)
- \* バスを乗って旅行に行きます。 →バスに乗って旅行に行きます。 (金・齊藤、1994、p.61)
- \* 朝に早く起きました。 →朝早く起きました。 (金・齊藤、1994、p.61)
- \* 高校時 →高校の時、 (齊藤、2007、p.277)
- \* 友だちに会うことを好きです。 →友だちに会うことが好きです。 (齊藤、2007、p.280)

(助動詞)

- \* 今から熱心に努力するだろうです。 →今から熱心に努力するだろうと思います。 (齊藤、2007、p.281)
- \* 何でも成就できるだと思います。 →何でも成就できると思います。 (齊藤、2007、p.281)

(副詞)

\* 夢に対して大い考えてきたが → 夢に対して大いに考えてきたが、 (齊藤、2007、p.276)

(敬語)

\* 私のお母様は五十才です。 → 私の母は五十才です。 (金・齊藤、1994、p.63)

ここであげた誤用例に関しては、各論文ですでに言及したので、ここでは説明を省くが、学生の作文には今もこのような間違いが多くみられる。誤用が生じる原因はさまざまであると思われるが、韓国語の干渉による間違いが多いというのは否定できない。

## 7. 2007年度(2学期)の大学生の作文にみられた誤用例について

次に、2007年度に書かれた学生の作文を具体的にみていく。

ここでは中級レベルの学生の電子メールの文章にみられた誤用例と日本の昔話に関する感想文について述べていく。

### 7.1. 電子メールの文章

3、4年生を対象とした「実務日本語」の授業で、簡単な手紙文の書き方について説明したあと、実際に学生から筆者に電子メールを出すという課題を出した。電子メールで文章を書くときには、漢字やひらがな、カタカナ等の文字の間違いは殆んどみられないが、学習者が気をつけなければならない、いくつかの事柄がある。次にあげるのは実際に学生から送られてきた文章にみられる誤用例であるが、ここでは「文字と音、促音、長音・短音、清音・濁音、漢字語+する、助詞、動詞・形容詞、韓国語式日本語、ことばの意味用法、敬語」等に関するものをあげた。尚、筆者は学生から送られてきたメールを添削し、授業中に間違いやすい例をあげて説明した。

#### (1) 文字と音

\* こんばんわ

こんばんは

日本語には、「は(ha→wa)」「へ(he→e)」「を(wo→o)」のように、文字と発音が異なるものがあるが、学生の作文にもこのような例がみられた。挨拶のことばの成り立ちについて説明すれば、このような問題は解決できると思われる。

## (2)促音の問題

\*先生いつも教えてくださてありがとうございます。  
先生いつも教えてくださってありがとうございます。

促音を表記するとき、「っ」を書き忘れている場合が何例かみられたが、「っ」の音が1拍であることを意識できるよう、手をたたくとか足踏みするとかといった動作を伴った方法で指導すれば間違いが少なくなると思われる。

## (3)長音・短音

\*サイト先生～  
先生のお名前は何の漢字かわからなくてカタカナで、、、

齊藤(さいとう)先生  
先生のお名前はどんな漢字かわからなくてカタカナで、、、

殆んどの学生は「齊藤先生」というように漢字で書いていたが、「サイト先生」と書いた学生が3、4名いた。これは、「齊藤」を韓国語で書くと「사이토」となるので、学生がハングルをそのままカタカナにしたために生じた誤りであると思われる。また、韓国語には長音、短音の区別があることはあるが明確でない場合があり、「サイト」なのか「サイトウ」なのか分からなかったために生じた誤用例であると思われる。このほかにも「メール」とすべきところを「先生にメルします。」のような例もみられた。また、「何の」と「どんな」の誤用例は、韓国語の「선생님의 성함은 어떤 한자인가 모르겠습니다。」の「어떤」を「何の」としたために生じた誤りであると思われる。

## (4)清音・濁音

\*ごんにちは。  
こんにちは

これは、清音で書くべきところを濁音で書いてしまった例である。  
これに似た誤用例には次のようなものがあった。

\*では、これからもよろしくおねがいします。  
では、これからもよろしくおねがいします。

\*2007年も2ヶ月だけ残りました。  
2007年も2ヶ月だけ残りました。

これらは、韓国語においては、清音濁音をはっきり区別するといったことがないために生ずる間違いであろうと思われる。

### (5)漢字語+する

\*今、とても不安していて何を話したかよくわかりません。

今、とても不安で何を話したかよくわかりません。

これは、韓国語の「불안하다」の하다が日本語の「する」に当たるので、「不安していて」とした例である。

### (6)動詞形容詞の活用

\*胸がむかつかたり、腹をしたりとても痛いでした。

胸がむかついたり、腹をしたりとても痛かったです。

これは、動詞形容詞の活用を正しく理解していないために生じた誤用例である。

### (7) (助詞)

\*最近、寒くなりました。風にひかないように気をつけてください。

最近、寒くなりました。風をひかないように気をつけてください。

これは、助詞の問題であるが、韓国語の「감기에 걸리지 않도록 주의해 주십시오」の「에」をそのまま日本語の「に」としたために生じた誤用例である。

### (8)韓国語式日本語

\*最近だんだん天気が寒くなっていますね。

最近だんだん寒くなってきましたね。

これは、日本語では、「天気が寒い」という言い方はしないが、韓国語では、「날씨가 춥다」という言い方をするので韓国語からの干渉により生じた誤用例であると思われる。この他にも次のような例がみられた。

\*もう天気が寒くなりますね。

もう寒くなりましたね。

### (9)ことばの意味用法

\*毎度、ありがとうございます。  
いつもお世話になっております。

これは、はじめの挨拶のことばとして書かれたものであるが、学生は、いつもお世話になっているという意味で書いたと思われるが、「毎度ありがとうございます」は商店などで用いる挨拶のことばであって、このような場合には用いない。ことばは常に「だれが、どこで、なんのために」用いるのかを考えて適切なものを選択しなければならない。他にも次のような例がみられた。

\*余命いくばくもない時間の間に熱心に勉強して（後略）  
残り少ない時間の中で熱心に勉強して

### (10)敬語

\*ご返事をお送ってくださったら、  
ご返事を送ってくださったら、

学生から先生へのメールの場合、敬語の用い方も問題になるとと思われる。これは、とにかく丁寧に書くようにするために間違えてしまった例である。また、次の例文のように「齊藤へ」と書いた学生が1名いた。

\*齊藤へ  
齊藤先生へ

メールに書かれた日本語をみると、いくつかの問題が指摘できる。ここにあげた誤用例の多くは学生たちの母語である韓国語と日本語が似ているために、まず韓国語で考え、それを日本語に直訳したために間違えたと思われる誤用例が多い。メールでなく、直接書いた場合には、漢字や句読点を韓国語と同じように書いてしまう場合もしばしばみられるが、メールであるからこそ生じた、あいさつの言葉に関する例や、敬語に関する問題点などがみられたと思う。ここにあげた例文以外にも「地下鉄を乗る」「母を会う」のような助詞の間違いや副詞の間違いやなども数多くみられた。

## 7.2. 日本の昔話の感想文

2学年の「中級会話」の授業で日本の昔話である「一寸法師」「花さかじいさん」「浦島太郎」「一休さん」等の日本の昔話のビデオをみて感想文を書き、発表するという課題を出した。学生たちの作文には日本語の誤用例もみられたが、文化の違いを感じさせる興味深い感想文があった。そこで、ここでは

「浦島太郎」の感想文を紹介し、作文の指導と文化に関する学習について考えていく。

○「浦島太郎」の感想文

「浦島太郎」の物語は、「助けた亀に連れていかれた龍宮で乙姫に歓待されて、3年を過ごす、別れに際し開けてはいけないといわれてもらった玉手箱を、帰ってから開けると、白煙がたちのぼって老人になったという」話(精選版日本国語大辞典)である。また、浦島物語の原型は、「一介の漁師と亀の姿をした神との結婚の物語で、漁師が神の国での幸せな生活の中で、神から課せられていたタブーを破ることによって別離に追込まれる、というものであったか。」(精選版日本国語大辞典)ともいわれている。

学生たちの作文には次のようなものがあつた。(尚、語句の間違い等については、筆者が訂正した所もある。)

(1)「韓国の昔の話は善良な人は福を受けて、悪い人は罰を受けるという話が大部分です。しかし、浦島太郎は亀を助けてあげて良いことをしたけれど、結局は福よりは罰みたいなものをうけることになりました。こんなに良いことをしても福を受けることができない日本の昔の話は、韓国の昔の話によくみえる勤善懲悪とはちょっと違います。この話は善と悪はみられず、浦島太郎は、亀を助けてあげた生命の恩人で老母を心配する善人ですが、タブーを破った罪で白髪の年寄りになったのは、完全な善人というものは存在しないことが分かって、人生の無常が分かるようになりました。」

(2)「韓国の伝来の童話は、善良な人は必ずハッピーエンドで終わります。日本の童話も殆んどそうですが、浦島太郎は善良で、亀を助けてあげたのに、なぜこんなに悲しいことを経験しなければならなかったのでしょうか。わたしがみた浦島太郎は何か教訓のない、おかしい話でした。」

(3)「いちばん不思議に思ったのは、浦島太郎で、良いことをしたのにどうして主人公に悪いことが起ったのかよくわかりません。私はいつも昔話には何らかの教えがあると思いますが、どう考えても浦島太郎の話の意味がわからないのです。」

(4)私が考えた海の姫からの褒美は、また昔にもどって、海のことは忘れて両親と幸せに過ごすことだと思ったけれど、。浦島太郎は全てをなくしてしまった。悪いことはしてなかったのに、。。

(5)時間は思ったより早く過ぎます。また、時間は「金」よりも重要だと言われます。時間を大切に使いましょう。

(6)私は、浦島太郎がいくら箱を開けたくても我慢したほうがよかったですと思いました。

これをみると、「浦島太郎」について書いた6名の学生のうち、物語の結末に納得がいかないと感じている学生が4名いたことがわかる。おそらく日本人が感想文を書いたら、少し違う内容になったのではないかと思われる。日本では小学校の学芸会等で、子供たちが「浦島太郎」の劇を演じることがあるが、こ

のような感想をもつ子供たちはあまり多くないと思われる。また、日本の民話に「鶴の恩返し」という物語があるが、これは、「與ひょうに命を救われ、美しい女房に変身した鶴の「つう」が、恩返しに織った千羽織にからむ夫の物欲のため、再び鶴となって飛び去る」(精選版日本国語大辞典)という話である。これも、與ひょうが、「織物を織っているところを決して見てはいけない」というタブーを破ったために永遠の別れを迎えるという物語であり、「タブーを破ったために不幸になる」という点に、二つの物語の共通点がある。しかし、今回の学生たちの作文をみると、タブーについて触れていたのは一人だけで、「悪いことをしていないのになぜ不幸にならなければならないのか」という感想文が中心であった。これは、日本と韓国の文化の差、あるいは、考え方の違いではないかとも思われる。日本語作文の指導をするときには、ことばに関する指導、文の内容、構成、文体等に関する指導はもちろんであるが、両国の文化や考え方に関する理解をも含めた指導をしていくことが必要であると思われる。

## 8. おわりに

外国語で「書く」という技能は、「聞く、話す、読む」と関連のある総合的的技能である。また、「聞く、読む」のような受身の作業ではなく、書き手の積極性が求められる。そして、国語教育における作文と異なる点は、学習者の理解語彙、または使用語彙数、文法の理解度、学習歴等との関係を見逃すことである。国語教育としての作文指導においては、初めから文の組み立ては「序論本論結論」あるいは、「起承転結」になっているか、文体は適切か、といった点を問題にしていけばいいが、日本語教育における作文指導はそうはいかない。学習者の意欲を削がないように注意を払いつつ、次のような段階を経て、適切な文体構造形式で書けるよう指導していくことが必要であると思われる。

①文字を書く→②短文を書く→③ある程度まとまった文章を書く→④目的に応じた文章を自由に書く

また、書かれた文、または文章には数多くの誤用例がみられることもあるが、教師はそれらの誤用例を次のような順序に従って、今後の指導に役立てていくことが望まれる。

①誤用例の収集→②誤用例の整理分析→③誤用の原因を明らかにする→④教材作成・教授法等に役立てる。

韓国の大学生の作文について考える場合、学習者の母語である韓国語と日本語との関係を無視することができない。日本語と韓国語とは類似点も多いが、異なっている点もあり、学生の作文には、韓国語の干渉によって生じる誤用例が多くみられる。そして、それらの誤用例から、学生が間違えやすい文法事項をある程度予測することができる。それは、学生の日本語のレベルによっても異なるが、表記の問題(かな表記・漢字表記、清音・濁音、促音・撥音、長音・短音等)、文法の問題(助詞、動詞・形容詞の活用、敬語、授受、受身使役等)、日本と韓国の言語行動の違いの問題(あいづち、依頼、断り等)であったりする。また、作文指導をする場合には、言語の背景にある文化をも考慮しなければならない。言語は広い意味で、その国の文化である。さらに、初級レベルの作文は、文法、句型練習、会話の時間等に学習す

することも可能ではあるが、やはり、誤用例がレベル別に、体系的に整理され、説明され、しかも目的、種類によって異なる日本語作文を体系的に学習できるような教材が必要であると思われる。したがって、教師には常に創意工夫をし、より効果的な教授法を模索しつつ、尚且つ新しい教材の準備をすることが求められている。また、そうすることによって、学生たちが同じような間違いを繰り返さずに、より正確で伝えたい内容を的確に表現できる作文を書くことができるようになるのだと思う。

## 【参考文献】

- 吉川武時(1978)「誤用例による研究の意義と方法」『日本語教育』34号日本語教育学会  
 宮崎茂子(1978)「誤用例をヒントに教授法を考える」『日本語教育』34号日本語教育学会  
 鈴木忍(1978)「文法上の誤用例から何を学ぶか—格助詞を中心に—」『日本語教育』34号日本語教育学会  
 佐治圭三(1978)「誤用例の検討—その一例—」『日本語教育』34号日本語教育学会  
 遠藤織枝(1978)「作文における誤用例—モスクワ大学生の場合—」『日本語教育』34号日本語教育学会  
 茅野直子、仁科喜久子(1978)「学生の誤用例分析と教授法への応用」『日本語教育』34号日本語教育学会  
 姫野昌子(1981)「文章表現の指導」『日本語教育』43号日本語教育学会  
 森田芳夫(1981)「韓国人学生の日本語学習における誤用例」『日本語教育』43号日本語教育学会  
 森田富美子(1981)「作文の評価」『日本語教育』43号日本語教育学会  
 小矢野哲夫(1981)「作文指導の実情と問題点—中・上級の場合—」『日本語教育』43号日本語教育学会  
 能登博義(1981)「中・上での作文指導—日本研究センターの場合—」『日本語教育』43号日本語教育学会  
 金永権・齊藤明美(1994)「韓国語話者の日本語学習에서의誤用例」『論文集』24翰林専門大学  
 金永権・齊藤明美(1996)「韓国語話者が間違えやすい日本語—名詞・形容詞・動詞の誤用例—」『論文集』26  
 翰林専門大学  
 齊藤明美(2002)「韓国語話者が誤り易い日本語の表現について」『日本語教育研究』3 韓国日本語教育学会  
 篠原信行(2004)「台湾の日本語学習者は日本語学習をどのように捉えているか」台湾日本語言文学研究会  
 国際交流基金(2006)『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2006年—概要』国際交流基金  
 齊藤明美(2006)「韓国と台湾における日本語学習の現状と日本に対するイメージについて」『日本語教育研究』11 韓国日語教育学会  
 齊藤明美(2007)「韓国における大学生の日本語作文の誤用例について—大学2年生の作文を中心に—」『韓日軍事文化研究』5 韓日軍事文化学会  
 精選版日本国語大辞典

## &lt; 요 지 &gt;

## 한국 대학생의 일본어 작문에 관한 고찰

본 논문은 한국 대학생의 일본어 작문에 대한 연구이다. 먼저, 외국어로 작문을 작성 한다는 것은 어떤 것일가에 대하여 서술하였으며, 이후, 앙케이트 조사 결과를 기초로 한국 대학생이 일본어 작문을 어떻게 파악하고 있는지를 언급하였다. 또한 필자가 이제까지 경험해온 한국 대학생에 있어서 작문지도 실적과 교수법에 대하여 기술하였다. 그리고 선행연구를 기초로 학생의 작문에서 보여 지는 오용에 분석의 의의에 대하여 논하였으며, 필자가 이제까지 몇 번에 걸쳐 행해온 오용에 분석 중에서 한국 대학생이 틀리기 쉬운 오용에의 대표적인 것을 몇 개 들어 설명하였다. 더불어 2007년도 2학기에 한림대학교 학생이 쓴 E-메일과 옛날이야기 감상문에서 보여 지는 오용예를 들어 그 문제점과 이후 지도에 대하여 언급하였다. 일본어와 한국어는 같이 한자를 쓰고 있으며, 어휘, 문법, 어순 등에서, 많은 유사점이 있어 대부분의 대학생들은 일본어를 영어보다 쉽게 느끼고 있는 것 같으나, 비슷하기 때문에 오히려 틀리는 경우도 많은 것 같다. 앞으로 학생들의 오용에 조사뿐만 아니라 이를 정리하여 분석함으로써 오용의 이유를 밝혀내 이를 토대로 새로운 교재를 작성하여, 보다 효율적인 일본어 작문 교수법을 개발해 나갈 필요가 있다고 사료된다. 그리함으로써 학생들이 같은 실수를 반복하지 않으므로써 이후 한국에서 일본어교육 발전에 조금이나마 보탬이 되었으면 한다.

## ■ 사이트 아카데미(齊藤明美)

한림대학교 일본학과 교수  
saito@hallym.ac.kr

■ 투 고 일 : 2008년 5월 31일